
BLACK ANGEL

青色一號

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK ANGEL

【Nコード】

N9844X

【作者名】

青色一號

【あらすじ】

西暦2081年、東海大震災で全てが崩壊し廃墟と化し海の底に沈んだ東京、人類は新たに水没した東京の上に新たに都市国家「新日本国」を築き上げた……。その世界で便利屋という職業を営む一人の女子高生が繰り広げる……。世界が終わりの始まりを迎えたその後の世界の物語。

プロローグ

西暦2081年。近未来の日本、全世界が終わりの始まりを迎えてから数十年後の世界。

東海大震災で壊滅し、大津波で水没して廃墟と化した東京。（旧東
京都市）

崩れかけたビルや看板、電信柱や高速道路がただ平然と水面から顔を出していた……。

海の中には倒れた電柱や自動車や倒壊した建物の瓦礫などが散乱しており、その上には多種多様な海草が波に漂い、その中を様々な魚たちが泳いでいた。

全てが廃墟と化し、人影がなくなった街。しかし人類はまだ生き残っていたのだ……。

生き残った人類は水没した都市の上に新たに都市を造り、その中で暮らしていた。

その後に新しい国家が造られたものの、しかし現状は無政府状態で治安も悪く、殺人や強盗、街中での銃撃などは日常茶飯事の出来事だった。文字通り、法律も糞もない世界だ。

更に地方では国防軍（旧自衛隊）と無国籍軍との内戦が勃発する毎日であった。

。そんな夢のような地獄みたいな世界でその少女は生まれ育った……

。そして少女は長い夢を見ていた。この興廃した世界でただ一人……

漆黒の翼を纏った墮天使、彼女の名は……ブラック・エンジン
エル……。

e p i s o d e 1 T H E P A R T Y O F R U I N (前編) (前書き)

前書きなんてそんなモンは存在しない。

episode 1 THE PARTY OF RUIN (前編)

新日本国、水上国家第二東京市。

水没した都市の上に高層ビルが聳え、都市から海の上を這うように道路が水没した旧市街の上を各ブロックの別の水上都市と繋がっていた。

大きな街の中には縦横無尽に路面電車や自動車が行きかい、デパートのビルには大きなTVモニターが映っていた。

「ニュースをお伝えします。本日正午、国防軍は独立国家、大東亜帝国軍の宣戦布告を受け、新日本政府は飛行戦艦鞍馬、大淀を現地へ移送中、護衛の戦車部隊が奥多摩半島にて敵駐留軍と交戦状態に陥り、已然戦闘をつつけており……」

市街地のとある一件のコンビニで一人の男が強盗に押し入り、カウンター越しに店員の女性に拳銃（グロック17）を突きつけて金を要求していた。

「いいからさっさと出せよ！！その中にあるのは分かってるんだよ！！」

「そんなこと言われても……私はアルバイトだし……」
「分かってるよ!!! いいから出せよ!!!」
「こ……困ります!」

他の客は全員コンビニから逃げ出し、店内では店員の女性と強盗に入った男と二人だけしかいない。

すると店のほうに長い黒髪を靡かせて荷物が入った麻袋を背負い、ヘッドフォンで音楽を聴きながらセーラー服の上にパーカーを着た女子高生が歩いてきた。

店内では依然、店員と強盗がもめていた。

「四の五の言わずに出せよ!! 当選発表に間に合わねえよ!!」
「だ……だから私にそんなこと言われても……」

その時自動ドアが開き、店内に一人の女子高生が入ってきた。

「ああ!? 誰だおめエは?」
「……」

無言のまま、彼女はレジの前で店員に銃を向ける男のまで立ち止まった。

すると彼女は強盗の男にこう言った。

「ちよつとそこの兄ちゃん、強盗してる最中悪いんだけどちよつと消えてくれないか?」

強盗の男は言った。

「何だ？いきなり何言ってるんだそのJKが！！ぶっ殺すぞ？」

強盗は今度は銃口を彼女に向けた。

「やれやれ・・・アンタ、自分がどれぐらいの価値があるか知らないみたいだな」

「価値だと？」

すると彼女は微笑み、こう言った。

「つまりこういうとき、アンタにはゴキブリ以下の価値しかないってことだよ・・・」

「なんだと！？てめエぶっ殺すぞ！！」

「試してみるか？ゴキブリに人間は殺せない」

「ゴキブリ・・・ゴキブリだとオ！？この俺がゴキブリだと！！・・・いいか小娘！！俺はゴキブリが大嫌いだ！！何故だか分かるかあッ！！」

「そんなこと知らねえよ、あたしはアンタのことなんて知らないし、知りたいとも思わねえ」

「じゃあよく聞け！！俺はガキの頃、ゴキブリが入ったコーヒーを無理やり飲まされたんだ！！学校の授業で・・・オマエに分かるか！！」

「分かんねえよ、だから何だ？そんな時食ったゴキブリが脳に回って頭が悪くなっただか？」

「なツ……なんだと!?この小娘エ!!もう勘弁ならねエ、殺してやる!!」

刹那、彼女は拳銃ベレッタを抜き、強盗に銃口を向け返した。

「ホウ酸団子をくれてやるよ、味わいな……」

少女は微笑んだ。

その瞬間、隙を見た彼女が一発の銃弾を放ち、強盗の持っていた拳銃を弾き飛ばして床に落とした。

「ぐあッ!!痛てエ!!痛てエよ!!」

「DQNのクセにいちいちギャーギャー騒ぐなよ、ガキじゃねーんだから」

「ちツ……畜生!!覚えてやがれ!!」

強盗の男はそう言い放つと、肩を抑えながらその場から退散していった。

「最後のはまるでお約束のセリフだな……」

「あッあの……危ないところをありがとうございました!」

店員の女性がその少女に話しかけた。

「あぁいや、あたしはただこれを買いにきただけで……」

ニヤケ顔で少女はそう答えで懐に拳銃を戻しレジの横にあつたチョコ棒を取ると、その場で封を開けて一本を口に銜えると、カウンタ―にお金を置いてその場から出入り口の方へ歩き出した。

「お金は置いとくぜ、釣はとっておきな」

すると店員の女性は店を出ようとした少女を呼び止めて彼女の名前を伺った。

「あッあのー!!」

「？」

「あなたは……一体……」

その質問に、彼女は振り返りざまにこう言った。

「屋久島レイ、しがない便利屋さ！」

海上都市、第二東京市立新東亜高等学校普通科。二年A組、出席番号26番、屋久島レイ。彼女は学校に通いながら便利屋という自由業を営むごくごく普通な女子高生である。

そして彼女のもう一つの職業、便利屋とは簡単に言えば「なんでも屋」のことだ。

一般的にこの世界での便利屋は殆ど基本が自由業で、もちろん始めるのには面接も履歴書も必要はない。

資格も学歴も関係ない、そもそもこの時代には逆にそんなものを持つているのは政府の関係者が警察のお偉いさんくらいだ。

便利屋の基本的な業務は主に最近では、武器の密輸や物資の受け渡し、さらにはコンピューターや電気関係の機械の修理、傭兵や殺し屋などの依頼が多い。総合的にさまざまなことをやる職業だがその通り危険も伴う仕事だ。

しかし収入はかなり高収入で、一念発起で始める人も少なくない。しかし殆どが耐えられずに辞めているケースが多い。

便利屋は職業柄危険な事件に巻き込まれやすく、多くの便利屋は必ずと言っていいほど拳銃や刀等の武器を常に所持している。ちなみにレイの愛用する銃はベレッタのM92Fのシルバーバレルカスタムである。

そんな世界で彼女は一年以上も便利屋を続けている。彼女を知る人間は皆、何故ここまで続けられるのかと驚いたというより呆れている者が多い。

「便利屋なんて、ただのお遊びさ……」

無表情にレイはそう言う、しかし彼女が便利屋を始めたのには理由があった。

しかし彼女は誰にもその訳を話したことがないし、あまり語ろうともしない。だから彼女の周りの人間はどういった経緯で彼女が便利屋を始めたのか誰も知らない。

そして今日も彼女は依頼者の下へと向かっていた。

寂れた商店街にやってきた彼女は、ある一軒の古い古道具店を見つけてそこに立ち寄った。

彼女はふらふらと店内をうろついた後はエロ漫画雑誌を手にとって立ち読みをした。

ニヤニヤした横顔を覗かせながらエロ雑誌を立ち読みする少女のその様子を不思議そうに店主の女の子は見ていた。

「（あの子……何見てるんだろっ?）」

「（おお〜！胸おっきいなあ〜　こんなの揉んで見たいwww）」

小一時間ほど立ち読みをしたところで雑誌を棚に戻し、レイは満足げな顔でレジの方へと向かってきた。
店主の女の子は慌てて対応に移った。

「……地図ください……」

「え？あつはい！……地図ですね、少々お待ちを！……」

慌てて地図を探す店主の女の子を見てた少女はニヤニヤしながら観察していた。

「（この店員の子も可愛い〜！）」

「……あの？……地図これでいいですか？……」

「えっ！ああ……これこれ！！どうもありがとう……エ

へへ」

半分ニヤケ顔でレイは地図を受け取った。

地図を広げて依頼者の待ち合わせ場所を探していると、店員の子が彼女に話しかけてきた。

「あの、道は分かりますか？」

「いやあ、この辺りは闇市とバラック街で入り組んでで土地勘があつても迷つちゃうんだよね……」

「ああ、分かります。私もたまに迷い込んで……あの辺りは変な人が多くて近づく人なんてあまり見かけませんしね」

「この世界じゃDQNはモンスターみたいな存在だし、エンカウントすると相手するのがめんどくさいだね……まったく、警察はただの飾りだよなw」

「そうですね！」

店主の子は笑って答えた。

「あの、あなたのお名前は……」

「えっ？」

「ああッ！いえッ……その私、こんなに人と話したことなかつたもので……もしよろしければ……」

店主の子は首を振って照れたよいな表情で言った。

「屋久島レイ、よろしくね！」

「はッはい！こちらこそ……私は九条ミサといいます！」

「ミサさんか……かわいいですね」

「ええ?! そんなことないですよー！」

「ここってあなたがやっているお店なの？」

「ええ、元々は私の叔父が始めて……」

顔を少し赤くしてその子は照れた、その様子にレイは顔がニヤけた。

「最近はどう? お客様は……」

「いえ、それほど……近頃はめつきり来る人も来なくなりまして……」

「そうなんだ……」

「まあ仕方のないことなんですよね、この商店街は昔はもっと活気があったんですが殆どのお店が店を閉めてしまって……今では私のお店を含む残り三軒のみになりましたよ。」

「でもいつからなの? この商店街にお客が来なくなったのって……」

「もう三ヶ月も前の話になるんですが、ここの商店街を含む地域全体に再開発の話が持ち上がったんです」

「再開発？」

「ええ。それも一方的に……なんでも商店街の住人達で話し合いをするように要求したんですが、相手の不動産屋側は相手にもしてくれなかったんです。」

話の内容がなにやら怪しい方向へと向かっていった。気がかりになったレイは荷物の入った麻袋を下ろし、彼女から話を聞くことにした。

「よかったらあたしに詳しく話してくれない？」

「はい……実は最近、ウチに毎日のように立ち退きをしろという人が来るんです……」

「立ち退き！？どういうことですか？」

「一週間ほど前、ある人たちがこの店にやってきたんです……」

話によると一週間前、土地の貸し出しをしていたここの地区の管理人が何者かに殺されたそうで、不動産屋を名乗る男たちが店にやってきてここの土地の所有権は我々に渡ったと言い、一週間以内に立ち退かなければ強制的に排除するなど幾度に渡って嫌がらせを続けているらしい。

しかしレイは依頼人の元へ向かう途中だったが、その話を聞いたらいてもたってもいらねず、レイは行動に移ることにした。

「酷い連中だな．．．．分かった！あたしがなんとかしてあげるよ！」

「ホントに！？で．．．．でもやっぱり無理じゃ．．．．」

「あたしを誰だと思ってるんだ？職業柄こういうゴタゴタの処理は得意分野なんだぜ？」

「へ．．．．」

「いいよ、一銭の金にもならないけれど、でも黙って見過ごすわけにはいかないよ！安心しな、この店もあなたもあたしが守ってやるよ！」

レイは彼女にそう言う店を出て何処かへと歩いていった。そしてレイのその後姿を彼女は不思議そうな顔で見つめていた。

e p i s o d e 1 T H E P A R T Y O F R U I N (前編) (後書き)

T H E P A R T Y O F R U I N 後編に続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9844x/>

BLACK ANGEL

2011年11月7日12時03分発行